

見ること、見えなくなること、見えるようにすること ——リルケの経験——

和田 渡*

はじめに

ひらがなの「みる」は、漢字では、見る、視る、診る、観るなどで示される。英語で「みる」に相当するのは、see, look, watch, glance, observeである。ドイツ語の場合は、sehen, schauen, ansehen, anblicken, anschauen, betrachten, angucken, zusehen, zuschauen, beobachten, anstarren など、フランス語の場合は、voir, regarder, considérer, contempler, lancer, dévisager, observer などである。「みる」に関するこれらの動詞は、言うまでもなく、われわれの視覚的なふるまい方がいかに多様であるか、その証左に他ならない。「みる」という動詞にどの言葉を選ぶかは、主体と主体がみている対象（知覚や想起、想像などの対象、理念的対象など）との相関関係を主題化する仕方や、主体が自己自身や他者、対象（具体的事物、理念的対象）、意味などをどのようにみているのかを主題化する仕方によって変わってくる。また、他者が自己をみる見方や、他者自身の心的な世界をみる見方に焦点をあてる仕方によっても変わってくる。

「見るということ」は、哲学や心理学、大脳生理学、脳神経科学などの研究対象になる。哲学や一部の心理学では、「見ること」が内的反省の対象になり、科学では外的観察の対象になる。それに対して、ある種の芸術家にとっては、「見ること」がもっとも切実な生の課題になる。その一例を、宇佐見英治の描くジャコモッティに見ることができる。宇佐見は、ジャコメッ

* 阪南大学教授

ティについてこう述べている。「見えるものを見えるとおりに描くことに生涯を傾けたこの画家にとっては、芸術はそれ自身が目的でなく、見るための手段であり、見ることは生きること、より深く見ることは、より自由により強く生きることであった」¹⁾。宇佐見はこうも述べている。「見るとは眼によって戦うこと、ものを対象世界に見出し、見分け、見確かめることだ。視覚の本性は、何よりもまず見えるものと見えないものとを識別することだ」²⁾。宇佐見が言うように、ジャコメッティにとって、見ることはまさに生きることとひとつであり、眼によって戦うことであり、見えるものと見えないものを識別する労苦であった。

詩人や作家においても、「見ること」は重要な課題であることは言うまでもない。彼らは、よく見て、見たものを洗練されたことばにつなげることに苦勞する。難解なことばを選ぶ詩人や作家もいるが、しばしば平明なことばで奥深い真実を語る人もいる。意外な角度から、見逃されていることを明らかにする人も少なくない。たとえばアメリカの絵本作家、マーシャ・ブラウン(1918~)はこう書く。

目は みえる
 うまれたときから
 でも みることは—
 みえることとは ちがう。

みること
 それは 目で あるくこと
 あたらしい せかいへと³⁾。

みることで
 あなたは みみを かたむける

みんなの いってることに⁴⁾。

みることで あなたは
すてきなものを ところに ためこむ
そして なんども おもいだす⁵⁾。

マーシャ・ブラウンは、「みること」を眼や耳、歩行、心、想起などつなげて、やさしいことばで語っている。ブラウンと同様に、「見ること」が一体どういう出来事であるかを考え続け、「見ること」と心、内面（内部）との関わりを探究したのが Rilke である。Rilke は、見えるものが見えなくなる過程と、見えなくなったものをもう一度現在に引き戻す過程を見つめる一方で、後期になると、見えなくなったもののよみがえりの願望に込めつつ、それをことばによって見えるようにすることが詩作の課題であると考えようになった。Rilke は、他方で、「見ること」がまずは頭や身体の動きにつれて見えてくるものとの感覚的な出会いであるという事実も重んじている。その出会い方に主体の過去の経験や関心が反映するという点には詳しく言及しなかったとしても、「見ること」の感覚的源泉において生ずる出来事に注意を払った。しかし、Rilke がとりわけ執拗に探究したのは、見えてくるものを見るという経験のなかで、「見ること」がどのような経過をたどり、その経過のなかでどのような出来事が立ち現われてくるかということであった。

そこで、以下では、「見ること」にかかわる問題を、とくに Rilke の小説『マルテの手記』⁶⁾ と、いくつかの詩ならびに手紙と関連づけて考察してみたい。

1 『マルテの手記』と「見ること」「見えなくなること」「再び見いだすこと」

よく知られた文章の引用から始めよう。「僕は見ることを学んでいる。どうなっているのか分からないが、すべてのものが僕のなかにいっそう深く入りこんでくる。ふだんはいつも終わりになったところで終わらないのだ。僕には僕の知らないような内部 (ein Inneres) がある。すべてのものが、いまはそのなかへと向かう。そこでどんなことが起きているのか、僕には分からない」⁷⁾。この文章には、『マルテの手記』を書いた時期から、それ以降のリルケの歩みを貫く根本問題が暗示されている。それを要約すれば、「見ることが不分明な経過であるということ」「見たものが心のなかに入りこんでくるとのこと」「その内部が知りえないということ」「内部が有限なのか無限なのかが定かではないということ」「心のなかでどんなことが、どのようにして起きているのかよく分からないということ」である。マルテにとって、「見ること」は、何よりも自己において不断に生起する、容易には見定めがたい不可思議な出来事として受けとめられている。

われわれの経験は刻々と移行しているために、今見ているものをずっと見ているわけにはいかない。別のものに視線は移動していく。しかし、新しいものに視線が向かう時、たった今日にしたものは消失するのではなく、「心のなか、私の内部」へと沈下していく。とはいえ、それがどのようにして沈んでいき、どこへと向かうのかは誰も知りえない。そもそも、心がどのような次元を形成しているのかが不明であり、心に底があるのかも分からないため、見たものの行く先は追跡できない。目に見えるものが、けっして目に見えない心のなかへ沈んでいくという出来事には何かしら神秘的なもの、あるいは主体を当惑させるようなものが伴っている⁸⁾。この動きの主人公になりえない主体は、後に述べるが、しばしばおのれの主体性を失わざるをえないのである。

マルテが見つめているのは、すでに述べたように、見たものが心のなかへと沈んでいくという、現在から過去への意識の流れである。この流れが行き着く先がどこなのか、どこで終わるのか、終わらないのか定かではない。どのように流れて、どのように流れさるのかも見分けがたい。マルテは、その見定めがたさに困惑しながら、まずは見ることに集中し、見ている働きに注意を向け、見たものを書きとめることに専念する。その作業が、「見ることを学ぶ」ということである。しかし、それは「見るとはどういうことか」を抽象的に考える机上の作業ではない。その作業は、感覚的な経験や幼児期の経験、読む経験、見たものや読んだもの、考えたことなどを現在に引き戻す想起の経験などを深めていき、見えるものを見ることと、それに結びつく多様な経験に注意を払うことである。

感覚的な経験においては、主体は、出会うものに対して、まずは感受性を開き、それらの細部を受けとめることが中心になる。そこでは、主体は自分が出会うものを意図的に選ぶことはできない。主体はまずは自分ではないものに遭遇するのである。この場合の遭遇には、主体が出会うという能動的意味よりも、主体が出会われるという受動的意味が含まれる。マルテは、多くの都市や人々、事物、動物を見、鳥の飛ぶさまや、早朝に小さな草花の花開くさまを感じなければと願う⁹⁾。出会われてくるものとの接触の経験をありのままに受容したいと望むのである。そのようにして感受する経験のなかで生ずる出来事に注目することが、「見ることを学ぶこと」に含まれる。

感覚的な経験は、しばしば、ことばと結びついて意味的な経験へと移行する。多種多様な感覚的な出会いのなかから、ことばが出現する。ものと遭遇するとき、ことばが主体の内部から出現する。そのときに、どのようなことばが出現するかは、出現するまで分からない。いずれにせよ、そうした出来事が可能になるのは、かつて出会われたことばが主体の内部へと沈澱しているからである。そのあらかじめ予測できない出来事に注意するのも、「見ることを学ぶこと」の一部である。

マルテがとくに注目するのは、現在から過去への不断の移行がおのずと生起しているという出来事である。今見えているものも、注意して見ているものも、視線の方向が変わったとたんに、現在から離れて過去へと沈んでいくが、この沈下のプロセスを止めることはできない。それはいわばひとりで生起するのである。この自然的な生起のなかで、見たものが見えないものへと変容する。それゆえに、「見ることを学ぶこと」とは、現在の知覚経験と、知覚されたものが過去へと自然的な仕方に変容する過程を追跡することである。

しかし、それは知覚とその変容を内観するだけにとどまらない。現在から過去への移行の過程で生じるのは、過去へと沈下したものが現在へと結びついてくるといふ現象である。マルテにとって、見ることは現在の知覚経験においてものを見ることにとどまらない。見ることは、追憶の眼差しで過去の一側面を現在に呼び戻すことでもある。それは、心に痕跡を残し、潜在的に保持された特定の経験の諸相を丹念に追跡することである。マルテは、追跡可能な過去の断片を思い起こして、記述していく。それは、印象に残ることや、見たもの、感じたこと、考えたこと、書いたことなど、過去となった出来事を現在の経験のなかで再現することである。とはいえ、この種の再現は、過去を蘇らせようとする意志を起点とするとしても、再現の過程そのものは、意図的に繰り返すことのできないものである。再現するという働きは、何かを受動的に再現されてくるといふ働きを待って可能になる。自己の内部の出来事を意のままにくまなく再現することなどできない。何かしら分からぬままに過去が浮かび上がってくるがゆえに、それに引きずられるようにして想起の経験が進行するのである。言い換えれば、想起の現象は、主体が想起するというよりも、想起されるものにつき従う仕方主体が内部を見つめるときに生起するのである。

マルテは、こうした状況を「書くということ」と結びつけて記述している。マルテは、何か書いてみようとする気持ちを持つ以前から、自分が何か偉大

なものの前に立たされていたように記憶すると述べる¹⁰⁾。その後、こう続ける。「しかし、今度は僕が書かれるのだ。僕は刻々と移ろう印象なのだ」¹¹⁾。書くという経験は、自分が主体的に書くというよりも、「ある偉大なもの」、あるいは「ある絶対的なもの」によって書くように促されるということなのである。それは、主体の恣意性を超えた次元で生起する出来事である。想起の経験についても同様のことが言える。もう一度くりかえすが、思い出すように促されるから思い出すのである。マルテのみならず、誰にとっても、近未来に何を書き、何を思い出すかは自分であらかじめ決めることはできない。

現在から過去への後退の過程と、過去から現在への呼び戻しの過程を注意して学び続けるマルテが書きとめているのは、いずれの過程にも、主体が意のままにはしえない働きが生起しているということである。マルテは、見つめる意志、学ぶ姿勢が、いわば主体に贈られてくる根源的な促しの働きによって支えられていると見なしている。マルテが「偉大なもの」と名づけるものは、この促しの力に他ならないであろう。「見ること」、「見えなくなること」、「再び見いだすこと」という経験を記述するなかで、マルテが注意しているのは、そうした経験を支えているより深いレヴェルの経験の位相である。

『マルテの手記』を通してこの位相を明らかにしたリルケは、その後、経験の深層の出来事とのかかわりを一層深めることになる。次に、その一側面を、決定的な意味を持つと考えられる詩に焦点をあてて考察してみたい。

2 リルケの「転向」

『マルテの手記』は、1904年から7年の歳月をかけて書かれ、1910年に完成した。その4年後に書かれたのが「転向 Wendung」¹²⁾である。この詩は、『マルテの手記』を通して「見ること」と、その変容の経験を見つめたリル

ケが、それまでの歩みを振り返りつつ、その後の自分の方向転換をはっきりと自覚した証として書かれている。終わりの方の一部を引用する。

なぜなら視ることには 限度があるからだ。

視られた世界は

愛のなかで栄えたいと思うのだ。

眼の仕事は果たされたのだ、

いまは心の仕事をするがいい、

おまえの内部に捕えられたあの心象たちで、一なにせ

おまえは取り押えておきながら、知ってはいないのだから。

内部の男よ、みるがいい、おまえの内部の少女を、

数しれぬ自然から獲得されたものの、それだけで

まだ けっして

愛されたことのない この少女を¹³⁾。

「転向」という詩の鍵は、「眼の仕事 (Werk des Gesichts)」と「心の仕事 (Herz-Werk)」の対比である。前者は、『マルテの手記』の中心課題であった。そこでは、見ることと、それに結びつく出来事を注意深く生きなおすことが重要な仕事であった。それを通じて、リルケが直面したのが、すでに述べたように、「偉大なもの」であった。この「偉大なもの」に支えられた経験の諸相にあらためてとり組みなおす決意が、「転向」に示されている。その決意は、「心の仕事」をするというあらたな課題として自覚された。ケーテ・ハンブルガーは、「転向」という詩のなかに、「視ることの危機」の自覚と、「視ること」を「愛」に変えたいというリルケの決意が見られると正当に述べている¹⁴⁾。「心の仕事」とは、見ることを通じて見えなくなったものに愛を伝えること、視力の限界を超えて、心に沈澱した見えないものを愛の

力ではみえらせることである。さらにまた、愛をこめてつくりあげた心象をことばに変えて見えるものにする作業である。そのためには、自分の内面の世界との関係を愛の情念を持って生きることが欠かせない。内面は単なる内観の対象としてではなく、心情的にかかわるべき特別な次元として現われてくる。このようにして、リルケにおいては、誰一人として直視することのできない生の次元が愛と結びつく主題として現われたのである¹⁵⁾。

1914年に、リルケはまた「五つの歌」を書いたが、その5番目の詩でこう歌っている。

すべての存在を貫いて、[・]ひ[・]と[・]つ[・]の空間がひろがる、—
 世界内面空間が。鳥たちは、静かに
 私たちを貫いて飛ぶ。おお、成長しようとする私、
 その私が外部をみる、すると私の[・]内[・]部[・]に、樹が育つ¹⁶⁾。

この詩文から明らかなように、リルケにとって、内面は主体の内部に孤立した仕方で見出されるものではない。リルケの目には、すべての存在（事物、生物、私、他者などすべての存在を含む）を貫ぬく空間がひろがり、その空間が世界内面空間として把握されている。すなわち、この空間は、外部世界と内部世界が相互に交じり合い、入り組んで生成し、影響を与え、与えられるなかで成長するような次元と見なされている。この次元においては、外部の出来事は、観察されるだけの出来事ではなく、私の内部に浸透することをやめない。そのことを通じて、私は不断に成長へと促される。成長した私が外部を見るとき、外部は以前のそれとは違ったものになり、変質した外部はただちに私を貫いて、私を別の私へと導くのである。世界とひとつとなって生成する出来事、それがリルケの言う「世界内面空間」である。

こうした外部と内部の相互浸透的生成という性格をもつ空間に対して、愛情をこめてかかわっていくことが「心の仕事」をすることである。この作業

は、知覚とその変容、見たものの想起の働きを注意深く見つめる「眼の仕事」とは異なり、世界内面空間において生起する出来事と抱擁する気持ちを持って接することである。「眼の仕事」はへだたりを前提するが、「心の仕事」は、それを排して、出来事との情愛的関係に入ることである。

以上で述べたように、リルケは、『マルテの手記』を書いた後、「眼の仕事」から「心の仕事」への移行の必要性を自覚し、「心の仕事」をおのれに課した。その仕事の中心は、世界内面空間を愛の気持ちをこめて生きることであった。愛がなければ、世界内面空間は栄えることがないというのがリルケの信念となった。「転向」や同じ時期に書かれた詩において示された「心の仕事」は、その後も継続され、世界内面空間への関心も一貫して維持された。しかし、『ドゥイノの悲歌』¹⁷⁾のなかで、その姿勢にあらたな展開が見られる。章を改めて、その点に注目して考察してみたい。

3 『ドゥイノの悲歌』と世界内面空間

世界内面空間と「心の仕事」がどのようにかわるかを鮮明に歌いあげているのが、「第九の悲歌」である。この詩は、最初の6行と最後の3行は1913年に書かれたが、その他の部分は1922年に書かれた。リルケは、外界の物たちがもっとも移ろいやすい存在であるわれわれによって目に見えぬ心のなかで(in unsichtbaren Herzen) 転化されることを望んでいると見なしている¹⁸⁾。見る働きにおいては、世界のなかの見えるものがわれわれの心のなかに入りこんで見えないものとなる。この出来事は常に生起しており、マルテが見つめていたものである。しかし、悲歌を書くにいたって、リルケはいまや、物たちがわれわれの心のなかでよみがえることを望んでいると、物たちの側の願望を詩のなかに導入している。1において、マルテは過去に沈んだものが主体に想起を促してくるという経験を記述したと述べたが、「第九の悲歌」では、物たちの主体への促しが主題化されている。リルケの詩の一部

を、手塚富雄訳で見てみよう。

大地よ、これがおんみの願うところではないか、目に見えぬものとしてわれわれの心のなかによみがえることが？—それがおんみの夢ではないか、いつか目に見えぬものとなることが。—そうだ、大地よ！目に見えぬものとしてよみがえることが！¹⁹⁾

この詩の眼目は次の点にある。すなわち、われわれは、眼に見えぬものと化したものを想起によってよみがえらせる主体ではなく、目に見えぬものとなったものよみがえりたいという願望に答えるべき主体だということである。主体はもはや、過去に遡行して主体の意識にひっかかるものを現在に連れ戻す能動的な反省の主体ではない。主体はむしろ、主体の内部に入りこんで見えないものになった物たちのよみがえりの願望に応答する受身の存在となるのである。リルケは、この悲歌のおしまいで「有り余る現にある存在が私の心のなかにはとぼしり出る」²⁰⁾と締めくくって、私の内部で次から次へとよみがえってくる物たちの奔流を歌にしている。

われわれの心のなかでよみがえりたいと望む物たちに、リルケはことばによって答えようとする。ことばを発するすべを持たない物たちの願望にことばを持って答えることこそが、リルケの望みであった。リルケはこう歌っている。「たぶんわれわれがここにいるのは、家、橋…などと言うためなのだ」²¹⁾。「ここは、ことばで言いうるものの時節、その故郷なのだ」²²⁾。この詩で注目すべきは、「言う sagen」が主体の意図的な発言を意味するものではないということである。主体が何かを言うのではなく、主体は主体に現われてくるものや、主体の内部でよみがえってくるものに促されてことばを発するのである。発語とは、常に発語へと促されることである。そうした出来事が生起するのは、主体が外部世界と深層の世界へと開かれた内部をもつ存在だからである。この内部は、すでに繰り返し述べたように、それ自身で生起している。

その自然的な出来事に支えられ、促されるがゆえに発語が可能になる。この内部こそが発語の源泉なのである。

以上で述べたように、第九の悲歌では、主体がその内部からよみがえるものに対して、心をこめて受容的な態度で接する局面が歌われている。しかし、その後、リルケは世界内面空間に対して積極的にかかわることの重要性を強調するようになる。この作業は、「愛」の情念が浸透しているがゆえに、「転向」で強調された「心の仕事」の継続と見なすことができる。その点について、章を改めて考察してみたい。

4 世界内面空間との愛と苦しみの交わり

1922年に「第十の悲歌」を完成させたリルケは、その2年後に、ノーラ・プルチャー・ヴィーデンプルック宛の手紙のなかで、内面世界について触れ、「われわれの内部の深層次元 (Tiefendimension unseres Inneren)」²³⁾ が広大な外部宇宙よりもはるかに広大であり、意識のピラミッドの一層深い断面では、単純な存在 (das einfache Sein) が出来事 (Ereignis) になるのではないかと述べている²⁴⁾。リルケによれば、この出来事とは、自意識の先端ではただ経過することが、犯しがたく現存し、すべてが同時的に存在するようになるということである²⁵⁾。現在の経験において生ずるすべての出来事は、マルテも意識していたように、刻々と過去へと後退していく。その速度を、この過去のみならず、まだ存在していないものをも含んで生成する出来事を、「究極の現在性 (Gegenwärtigkeit letzten Grades)」²⁶⁾ として把握できる形を示唆することが、『マルテの手記』を書いていた時期にすでに欲求としてあったとリルケは述べている²⁷⁾。ただし、その欲求は、1900年代には潜在的なものにとどまり、後年、それが顕在化したと見るべきであろう。

1925年のヴィトルト・フォン・フーレヴィッチ宛の手紙では、リルケはそれまでの小説と詩作の経験を振り返りながら、決定的なことをいくつも書き

記している。要約してみよう。まず第一に、純粹に地上的な、深く地上的な、きわめて幸福な地上的な意識のなかで (in einem rein irdischen, tief irdischen, selig irdischen Bewußtsein)、ここで見たもの、触れたものを、さらに広い、もっとも広い循環 (Umkreis) のなかに導き入れることである²⁸⁾。マルテは、見たものや触れたものが心のなかへと沈澱していくさまを見つめ続けたが、20年代の Rilke は、見たり触れたりする経験をより広い循環のなかへ積極的に導き入れようとしている。今や Rilke は、マルテのように意識経過の自然過程を見つめるだけでなく、自己の意識経験をひとつの全体的連関のなかへと融合させようと意志するのである。そのためには、二番目として、この地上にあるすべてのもの (alles Hiesige) を悪くしたり、引き下げないばかりでなく、それらをもっとも内的に理解し、変身させることである²⁹⁾。変身させるとは、一時的な、滅びやすい大地を、苦しみながら、しかも情熱的に (leidend und leidenschaftlich)、深くわれわれの内部に刻印し、それらの本質がわれわれの内部で「目に見えないもの」となって再生するようにすることである³⁰⁾。Rilke が強調するのは、移ろいゆくものを移ろいゆくままにするのではなく、それをわれわれの内部に刻みこむ努力を継続することである。しかし、見えなくなったものは次第にぼやけてしまうから、それを心に刻みこむことは容易ではない。また、心に刻む間にも、次から次へと過去化するものが入りこんでくるがゆえに、刻みこむ経験は收拾がつかなくなる。したがって、刻印の経験には、去っていくものを引き止めるための苦しみがない、忍耐も必要となるし、物に向き合う情熱も必要となるだろう。見えるものが見えないものになる過程は、意識的に注意して見つめなければ、当たり前前の平凡な出来事として過ぎてしまう。そのようにして何気なく過ぎてしまう出来事は、そのまま忘れ去られて、忘却の淵に沈んでしまう。この場合には、目に見えなくなったものが再生することはない。それゆえに、再生が可能になるためには、物たちと出会う現在の経験のなかで、それらを刻みこむ覚悟、苦しみや忍耐をとまなう意志が欠かせない。この意志の継続によっ

て、いずれわれわれの内部で再生するものが育ってくるのである。

リルケの美しい定義によれば、「われわれは目に見えないものを集める蜜蜂である Wir sind die Bienen des Unsichtbaren」³¹⁾。リルケはこの表現に続けて、フランス語で「われわれは目に見えるものの蜜を、目に見えないものの巨大な金の巣箱のなかへ貯えるためにせっせと集めている」³²⁾と強調文で表現している。この言い方によって、リルケはいくつもの意志的な試みを想定している。まずは、目に見えるものの蜜を集めることである。次に、それを目に見えないものの蜜箱のなかに貯え、おしまいに、その蜜箱のなかから目に見えないものを集めることである。最初の試みは、すでに述べたように、見えるものを心の内部へと刻印することであり、二番目のそれは、心の内部に刻印されて目には見えなくなったものを、いわば精神の眼差しによってよりわけていくことである。三番目にくるのが、集められた目に見えないものにことばを与え、それを見えるようにすることである。ただし、この試みは、すでに4で述べたように、目に見えなくなったもののみがえりの願望に応ずるような仕方なされるのである。

こうした一連の試みは、たしかに、主体の意志や自覚を前提としている。しかし、主体が意識して試みの道筋をつけても、その途上で何が起こるかを予見できない。たとえば、見えるものを心の内部に刻印することを試みるのは主体であっても、その試みがどのように成就するのかは主体には知られない。また、心の内部に刻印されたものを精神の眼でより分けていくときに何が起きているのかも定かではない。リルケが強調する目に見えないものを集めるという主体的な試みにおいても、内部に入りこんだものがそれ自身で集まってくる出来事が生起しなければ、集めるという試みは成就しない。その場合に、主体は自分が実際には何をしているのかを正確には知りえないままに、マルテがつかんでいた、ある「絶対的なもの」によって動かされているのかもしれない。このことは、第九の悲歌を書いたリルケが、想起を自分の内部でよみがえってくるものを把握すること見なしていたことともかか

わってくる。すなわち、主体は世界内面空間とのつながりのなかで生成する存在であるがゆえに、主体の能動的な働きといえども、主体を包みこんで常に生成する出来事からの働きかけなしには生起しないということである。有限な主体は永遠に流動する空間のなかで生成し、無限なるものに貫かれて生きるのである。ハイデガーは、「何のための詩人」と題するリルケ論のなかで、われわれのただ遂行し、意欲するだけの態度と異なり、その態度において対象となるものを、心の空間のもっとも内奥の目に見えないものの中へと変えることを内面化 (Er-innerung) と名づけている³³⁾。しかし、主体の能動的な働きの側面に言及するのみで、主体に働きかけてくる働きについては触れていない。リルケの試みを、ハイデガーのように「内面化」と呼ぶことに異論はないが、その試みのなかで生起する、主体と主体に到来するものが交錯する次元を考慮しない限り、リルケの片面的理解にとどまるであろう。

おわりに

以上で、マルテに「見ることを学ぶ」ことから出発させたリルケが、その後の詩作経験のなかで、「見ること」とどのように格闘したかについて述べた。リルケが見いだした究極の課題は、はかない存在としてのわれわれが、同じようにはかない地上の物たちと共鳴しあう世界内面空間の出来事を見つめることであった。この出来事に対する注意力と忍耐力を要する凝視を通じて、リルケは、『マルテの手記』のなかですでに確認していた、われわれが内部の絶対的な運動に依存するという事実を強調した。さらにまた、リルケはわれわれが物たちの願望に答えていく受容的な存在であることを「ドゥイノの悲歌」で歌った。しかし、リルケはわれわれの存在の受動性を認める一方で、世界内面空間を生きることの経験をさらに能動的に深めようと努力を重ねた。その過程を通じて読み取ることができるのは、われわれが物たち

を注意して見つめ、それらが入りこんでくる内部に意志的にかかわることのできる存在であると同時に、内部で生起する出来事に依存して生きる存在でもあるということである。リルケの経験は、こうした主体の両義的なあり方を明瞭にしている。リルケにとってもっとも大切なことは、この両義性を最後まで生き抜くことであつたと言えるであろう。

註

- 1) 宇佐見英治『見る人 ジャコモッティと矢内原』みすず書房、1999年、24頁。
- 2) 同書、47頁。
- 3) マーシャ・ブラウン、谷川俊太郎訳『目であるく、かたちをきく、さわってみる。』港の人、2011年、4頁。
- 4) 同書、19頁。
- 5) 同書、31頁。
- 6) Rainer Maria Rilke, Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge, Suhrkamp Verlag, 1975.
- 7) Ibid., S.9.
- 8) マルテが学ぼうとしている「見ること」とその変容は、「聴くこと」や「触ること」、「感じること」などについてもあてはまる。聞こえるもの、聴くものは、即座に聞こえないもの、聴けないものになるし、触る感触は、すぐに触れないものになる。しかし、聞いたものと聞こえなくなったもの、触れるものと触れなくなったものとの間には断絶は存在しない。両者はつながっている。このことに関連して、ノヴァーリスは興味深い文章を残している。「可視のものはみな不可視のものと境を接し—聞き取れるものは聞き取れないものと—触知しうるものは触知しえないものと—びったり接している。おそらくは思考しうるものは思考しえないものに—」(『ノヴァーリス作品集』I、今井文子訳、ちくま文庫、2006年、350頁)。
- 9) Rainer Maria Rilke, op.cit., S.21.
- 10) Vgl. Rainer Maria Rilke, op.cit., S.52.
- 11) Rainer Maria Rilke, op.cit., S.52.
- 12) リルケにとってのこの詩の決定的な意味は、ルー・アンドレアス＝サロメ宛の書簡から明らかである。「けさ、不思議な詩ができました。すぐ送ります。その詩を思わず『転向』と名づけました。それは私が生きるべきだとしたら、おそらく生じねばならないものを表しているからです」(Vgl. Rilke, Gesammelte Briefe in sechs Bänden, dritter Band, The Rinsen Book Co., Kyoto, 1977, S.388.)。
- 13) 『リルケ全集 第4巻 詩集Ⅳ』(塚越敏監修、河出書房新社、1991年)、117頁。

- 14) ケーテ・ハンブルガー、植和田光晴訳『リルケの詩の現象学的構造』せせらぎ出版、2014年、100頁参照。この研究書において、ハンブルガーは、リルケとフッサールにおける「見ること Schauen」を比較考察している。
- 15) 手塚富雄は、「ゲオルゲとリルケの研究」の第八章で、リルケにおける「愛」の問題を初期から後期までの全体を見渡して詳細に論じている。（『手塚富雄著作集』第四巻、中央公論社、昭和56年、217~356頁参照）。
- 16) 『リルケ全集 第4巻 詩集Ⅳ』、131頁。
- 17) Rilke, Werke in drei Bänden, Band 1, Insel Verlag, 1966.
- 18) Vgl. *ibid.*, S.475.
- 19) リルケ、手塚富雄訳『ドゥイノの悲歌』岩波文庫、2013年、75頁。傍点はリルケによる強調である。原文（Rilke, Werke in drei Bänden, Band 1, S.476.）を以下に示す。
 Erde, ist es nicht dies, was du willst: *unsichtbar*
 in uns ersthen? – Ist es dein Traum nicht,
 einmal unsichtbar zu sein? – Erde! unsichtbar!
 Was, wenn Verwandlung nicht, ist dein drängender Auftrag?
- 20) Rilke, Werke in drei Bänden, Band 1, S.476. 原文は以下の通りである。
 Überzähliges Dasein entspringt mir im Herzen.
- 21) *Ibid.*, S.474. 傍点はリルケによる強調である。
- 22) *Ibid.*, S.474.
- 23) Rainer Maria Rilke, Gesammelte Briefe in sechs Bänden, fünfter Band, S.291.
 内部の次元の広大なひろがりを意識していたのは、たとえばアウグスティヌス、パスカル、ディルタイ、フッサールなどであるが、リルケは内部世界の豊饒さを詩文によって象徴的な仕方で再現することに腐心した。
- 24) *Ibid.*, S.291.
- 25) *Ibid.*, S.291f.
- 26) *Ibid.*, S.292.
- 27) Vgl. *ibid.*, S.292.
- 28) Vgl. *ibid.*, S.373.
- 29) Vgl. *ibid.*, S.373f.
- 30) Vgl. *ibid.*, S.374.
- 31) *Ibid.*, S.374. 傍点はリルケによる強調である。
- 32) *Ibid.*, S.374. 原文は以下の通りである。
 Nous butinons éperdument le miel du visible, pour l'accumuler dans la grande ruche d'or de l'Invisible.
- 33) Martin Heidegger, Gesamtausgabe, Band 5, Holzwege, Vittorio Klostermann, 1997, S.309.
 ハイデガーは、『ライナー・マリア＝リルケ』の著者であるアンジェロスによると、リ

ルケが詩で表現したものと自分の思想の内容的な同一性を見て取っていたという（アンジェロス、富士川英郎、菅野照正訳『リルケ』新潮社、1957年、324頁参照）。

参考文献

- 『マルテの手記』（大山定一訳）、新潮文庫、1952年。
ジョルジュ・ブーレ、篠田浩一郎訳『円環の変貌』国文社、1961年。
『リルケ詩集』（片山敏彦訳）、みすず書房、1962年。
『リルケ詩集』（富士川英郎訳）、新潮文庫、1962年。
森有正『バビロンの流れのほとりにて』筑摩書房、1968年。
リルケ、森有正訳『フィレンツェだより』筑摩書房、1970年。
H.E. ホルトゥーゼン、塚越敏、清水毅訳『リルケ』理想社、1980年。
『手塚富雄著作集』第四巻、第五巻、中央公論社、1981年。
ヴィクトール・ヘル、後藤信幸訳『リルケの詩と実存』理想社、1981年。
M. デュフレンス、棧優訳『眼と耳 見えるものと聞こえるものの現象学』みすず書房、1995年。
辻邦生『薔薇の沈黙 リルケ論の試み』筑摩書房、2000年。
志村ふくみ『晩禱 リルケを読む』人文書院、2012年。
Adrian Stevens, Fred Wagner (Hrsg.), Rilke und die Moderne, Indicium, München 2000.
Roswitha M.Kant, Visualität in Rainer Maria Rilkes *Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*, Peter Lang, Frankfurt am Main 2002.
Ina Ritter, Die Epiphanie des Augenblicks, Peter Lang, Frankfurt am Main 2009.
Raoul Walisch, > daß wir nicht sehr verlässlich zu Haus sind in der gedeuteten Welt <, Königshausen & Neumann, Würzburg 2012.